

(様式第3号の1)

博士（甲）論文審査及び最終試験結果報告書

平成28年2月2日

文学研究科委員会 殿

論文審査及び最終試験委員

主査 スコット・ピュー

副査 坂井 隆

副査 徳永 紀美子



論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏 名
英文学専攻	09 英博後 01	岡裏 浩美
審査論文題目	<i>Searching for Suppressed Voices: The Gaze and Its Implications in Early Cold War Plays of Arthur Miller and Tennessee Williams</i>	
論文審査及び 最終試験結果	⊕ 否	
博士論文提出資格取得日	平成 24 年 11 月 6 日	
博士後期課程退学日	平成 25 年 3 月 31 日	

## 論文審査及び最終試験結果の要旨

学位請求審査論文の題目：

*Searching for Suppressed Voices: The Gaze and Its Implications in Early Cold War Plays of Arthur Miller and Tennessee Williams* (英語論文、165 ページ)

提出者：岡裏 浩美

### <論文概要>

本論文は、アメリカの代表的劇作家である Arthur Miller と Tennessee Williams の作品のうち、1940 年代後半から 1950 年代にかけて発表された 6 作品を扱い、社会全体が保守化する冷戦初期において彼らの作品がいかに体制転覆的であったのかを論証する画期的な論考である。

論者は、保守化した当時のアメリカ社会が脅威と見なした要素、特に男性の同性愛や女性の抑圧されたセクシュアリティとアイデンティティへの希求など、当時の演劇界においてあからさまに表現することが出来なかった要素を、Miller と Williams は、登場人物の台詞や身体言語（身振りやアクション）、特に「まなざし」(gaze: 見る・見られるという行為)を通して暗示的に表現している、と仮定する。この仮説を証明するために、non-verbal communication である、まなざしに焦点が当てられ、discourse の中に直接的に描く事ができなかった含意が分析される。

論考は、70 年代に始まった gaze 理論—— gaze には単なる情報収集以外にも、様々な含意（不平等な力関係、ジェンダー格差、階級差、欲望等）が秘められているとみなす——を中心に進められている。更に、フロイトやラカンの精神分析学、映画視覚論（特に Laura Mulvey のジェンダー研究を用いた先駆的映画論とその応用）、フェミニスト批評やパフォーマンス理論といった、「まなざし」に言及した多様な批評や理論を幅広く応用することで、保守性を期待された当時の演劇作品の中に、60 年代の様々な社会意識の変化の先駆となる、抑圧された声を検出しようと試みている。

分析の対象作品は、人種や階級的には、「主流の」アメリカ人とされる<白人・(下位)中産階級>を描いているものの、イデオロギー的には<逸脱>とされた存在に着目し、①劇中劇における登場人物間の見る・見られるという行為とその関係性に含意される力関係、②登場人物自身の見るという行為とそこに示唆される含意、③劇をどのように当時の保守的な観客に提示していくかという audience gaze、の 3 つのまなざしが分析される。

Part One では、Tennessee Williams の *A Streetcar Named Desire* における Blanche DuBois と、Arthur Miller の *The Crucible* における、Abigail Williams を含むピューリタンの少女達について、彼女たちの劇中劇における演技性と常に他者から見られる存在である点が分析される。その結果、男性の欲望や、まなざしに強要された模範的な女性を演じるだけの受動的で自己防衛的な女性の演技という標準的な読みを超え、抑圧された女性たちによる、抑圧された声の解放というオールタナティブな読み方が提示される。Part Two では、中産階級の白人男性たちに画一的な家父長役割を強要し、男性を封じ込めて監視していく冷戦期のアメリカ社会や家族を Foucault の言う パノプティコンと関連付け、その中で、他者の視線を絶えず気にして生きる男性たちの苦しみが分析される。Miller の *Death of a Salesman* では、様々



な矛盾する男性像に翻弄され、常に自己を演じ続ける Willy Loman に注目し、Williams の *The Glass Menagerie* では、対照的に、他者の視線による束縛から逃れ、1人の若き男性芸術家として、見るという行為の主体性を得る事で、アイデンティティや男らしさを確立しようとする Tom Wingfield に注目して、考察が行われる。その結果、冷戦期に TV 等のメディアを通して強調された masculinity (自信あふれる家父長) とは異なる、男性たちの不安や葛藤が、より鮮やかに浮かび上がることが指摘される。Part Three では、冷戦期に保守性が期待される演劇作品の中で直接的な描写や表現がタブーとされた同性愛的な欲望や男性同性愛者の苦しみが検証される。Miller の *A View from the Bridge* では、男らしさが強調されたイタリア系アメリカ人男性である Eddie が、女性的な美青年 Rodolpho を見つめる行為に注目し、Eddie のまなごしに秘められた同性愛的な欲望が精神分析学をベースに論じられる。Williams の *Cat on a Hot Tin Roof* においては、保守的な当時の観客に対して、どのように抑圧された同性愛的な欲望や、ゲイとしてのアイデンティティ、苦しみ等を提示していくのかという audience gaze について、特に同性愛者である著者 Williams 自身の戦略や試みとも関連付けながら、男性同性愛者の抑圧状況が検証される。

このような論考の結果、作風が全く異なるとされる Miller と Williams による保守的な冷戦初期のリアリズム家庭劇においても、当時の社会やイデオロギーではタブーとされた人々の抑圧された欲望、主張、抵抗が、60年代の社会運動に先駆けて、既に含意されていると結論づけられている。

#### <講評>

本論文は、アプローチの方法において画期的であり、質的にも量的にも博士論文にふさわしい研究成果となっている。しかし、以下の点は改良のための課題として指摘する事ができるであろう。

まず、分析の焦点を登場人物間の視線の交換においており、観客の視線はあまり考慮に入れていないように思える。例えば、Chapter Six の導入部 (117 頁) において“audience gaze”を分析すると宣言しているが、本論においてその点が十分に検証されているようには見えない。第2の問題点として、論の展開において、当然、考察の対象にすべき登場人物への目配りが十分ではない章がある。例えば、Chapter Four では、Tom とは対照的な Jim に対する考察が欠けている。“conformist society”を体現する Jim の役割を検証することはこの章の議論には不可欠である。また、Chapter Six では、Big Daddy への考察が欠けている。Brick と同様に異性愛と同性愛との境界を揺れ動く Big Daddy のセクシュアリティは論の展開上、無視できない要素である。更に、十分な議論を経ずに理論を一般化して作品に当てはめているように見える箇所が残っている。ほとんどの場合、理論を応用した解釈は十分な検討がなされているものの、女性の密かな抵抗がもつ規範の転覆性やパノプティコンのアナロジーを用いる解釈では、時として一般化が過ぎる傾向にある。

しかしながら、このような改善点は相対的な弱点にすぎず、論文全体の価値を損なうものではない。改善点の多くが新しい議論の種子ともなるもので、結果的には、研究の将来的充実・発展が十分に期待できるからである。

本論文は、博士論文としての研究技法、議論とその提示法が堅実であるのみならず、優れた論文に必要とされる新見性、洞察力、説得力を持つ。まず、本論文は、Mulvey が十分な分析をしているとは言い難い「男性の観

客が男性登場人物を見る」という点にまで踏み込み、興味深い考察を展開している（特に本論の Part Three）。アメリカ演劇研究においては、視覚や視点についての考察が手薄であり、その分野に関するまとまった先行研究がない時点で、この論考は画期的であり、学問的な貢献度が高いと評価できる。同様に、*Cat on a Hot Tin Roof*に同性愛というサブテキストを読み込んだ分析は、斬新でありながら説得力に富んでいる。更に、共時的に取り上げられた6作品を通して、その時代の枠組みである冷戦初期のアメリカ社会のパラノイド的な側面が、各作品に投影されていることが全体としてあぶり出され、文化論的にも興味深い論考になっている。また、論文全体での理論の援用に関しては、単独の理論に当てはめようとするのではなく、複数の理論を相互補助的に応用することでより客観的で説得力のある議論が展開されている。

以上のことから、論文審査委員会は、本論文が「博士（文学）」の学位に相応しい研究であると全員一致で結論を出した。